

学生として参加する里山保全活動～キャンエコ里山班～

人間環境学部2年 濱尾 基介

大学に入学した時の私は、「何かやつてみたい気持ちはあるのだけれど、何をすれば良いのかわからぬ」という思いを持っていました。そんな時に出会ったのが、現在所属している環境サークル「法政大学キャンバスクエコフーラム」、通称キャンエコです。キャンエコの活動は、樹木保全や里山保全、祭祭での環境対策など、その分野は多岐にわたり、現在では約10の班に分かれて活動しています。人生生活において何かきっかけがないと感じていた私は、まずは様々なキャンエコの活動に積極的に参加しました。その中で、私が最も興味を持つようになったのが、里山での活動です。

キャンエコ里山班は、茨城県・上浦市の大字にある里山をメインフルに、毎月一回、地元のNPO「茨波の自然と歴史の会」の方々のご協力をいただきながら活動しています。植付けや剪刈などの農作業を行ったり、鳥や竹の園化をしたり…その多くは普段都會で生活していくでは体験できないことがあります。そして、反対の気候を離れて感じながら、里山の歴史的価値や伝統文化などを学んでいます。また、活動には私たちのスタンスとして、「里山を楽しむ」ことを大切にしながら活動を続けています。

初めて茨波の里山に行つた時に感じたこととして、純粋な自然に対する感動と、懐かしさのよるもののがありました。それが、今となっては開発されてしまっている、なんなくてことばがある話。そうであると、六環のよきにあれだけの里山が残っていました。これが、どれだけ素晴らしいことなのかを感じはじめられませんでした。私は最初の活動にしてナツカリ里山の茶所しさにはまってしまいました。

そもそも「里山」というのは、人の手が加わった自然のことです。昔から人々の生活とは密接なつながりを持っています。そして、そのような自然と人間の関係を見つめ直すための場としても、重要な存在であるといえるでしょう。しかし、開発などによってますます失われつつあるのが現状で、茨波の里山も例外ではありません。市の開発計画に拘りして、会の方々の必死の努力によってその存続は守られています。

そんな状況での活動は、私たちキャンエコだけでなく、会の方々にとても意味のあることといえます。それは、会の方々の想いとして、茨波の歴史や文化を未来に伝えていきたいという気持ちがある中で、皆に私たちキャンエコ者と共に活動をすることで、その想いを伝えていくことができるからだと思います。

そこに、私たち「学生」がこのような活動に携わることの最大の意義があると思います。
また、この型が活動をしていく上で大切なことは、「誰が始めたことであるか」と思っています。キャンエコの先輩が最初に里山の活動を始めたのは2002年の11月だそうで、そこから里山班の活動は始まりました。毎月一回ながらも里山で活動し続けてきた成果が、徐々に会の方々には認られ、現在ではいくつかの力を使用させていただけますようになりました。ここ数年では、学校での出版のためにキャンエコ班から取組したテーマを使って大判冊を作ったりもしています。今後も、まずは放げないことを目標に活動していきたいと考えています。

キャンエコ里山班は、これからも会の方々や先輩方への感謝の気持ちを忘れずにいきます。そして、この活動を通して、私自身も成長させてもらっています。最後に、私のいつもの里山の楽しみといえば、「作業後のお供ご飯です。これにこだわります。みなさんもぜひ、気軽に里山に行ってみてはいかがですか？」



学生の環境改善活動

環境系総合サークルH.E.L.Pは、1997年に設立され、現在60名以上が在籍している多摩キャンバス唯一の環境サークルです。少しでも環境について興味を持つ、関心がある人が多い、情報交換や新たな活動へ進むための「場」を創ること。そして、環境問題を楽しみながら学び、新しい希望で環境問題を解決するための代替的な活動を大学、地域などで行う。また、H.E.L.Pの活動が良い意味での遊びの延長線上のものとなり、知的工夫をいかげ、「楽しく」活動することをコンセプトに活動しています。

例えば、2005年2月の卒効を期に京都盤定着について勉強した私たちは、各家庭での省エネ省資源の取り組みの重要性を再認識し、一人暮らしの学生にとって取り組みやすく効果的な対策を講べるため、この冬から環境家計簿を付けて始めました。

各メンバーの興味によって様々な活動を行っており、都市部を夜通しゴミ拾いながら歩く「ゴミ拾いオールナイトハイク」(6月)、子供たちへの環境教育活動と「D.R.P.(Dish

Return Project)」というゴミ減量対策を行う「小金井平和盆入り大会」(8月)などのほか、大学近くの烟をお借りして野菜を育て、収穫の喜びを味わうこと、その一つです。

そんなH.E.L.Pの代表的な活動に、多摩地区自主法政祭(10月)での取り組みがあります。大学祭では多くの答器ゴミが登場します。その対策として、2005年度は生協との協力でリサイクル可能な答器「リバッヂ」を試験的に導入しました。学生への周知を図る目的が達成されたため、来年度から生協で販売される弁当容器に採用される予定です。

また、今年度の新しい試みとして、岡崎雅史先生(経済学部)率いる「多摩キャンパスの活動への協力

や、企画サークルNICE-年と協力したMy攀推進イベントを催すなど、外部団体との協働にも積極的に取り組んでいます。

上記の活動はほんの一部ですが、H.E.L.Pは2006年度もさまざまな活動を通じて、「楽しみながら」環境改善活動を続けていきます。

http://www5.higlobe.ne.jp/~baroque_works/orange/



ゴミ拾いオールナイトハイクを終えて 2005年6月

多摩キャンバスでホタルを復活させ隊がスター

コラム1



作業は、まず田植鉢や田の地形や畠の斜度プロセスを説明され、スコップやカマの使い方をレクチャーされました。さっそく選択したちは道具を手に、他の生徒の野菜栽培者と一緒に実際に田植鉢や手植えする手の通し(手筋)内の泥棒石や剪脚の盛り付けをしました。水路は高さ180センチの堤防を高く築き、そこには渠化と同時に2キロメートル(幅延長70メートル)、他の水をボンブルブルしていままで流れ出たところに取り戻した泥棒石のみを取りましたが、手筋からなる手筋が近くの木の間にひびきがでたので手筋は難航、飛び石を押す、そのまま手筋が手筋が手筋になってしまった。その後、水路の込みでようやく泥棒石を復活させました。その後、リモート操作の泥棒石を運搬し、全員が泥棒石の運搬作業を無事終えました。女生連隊は土台として運搬してきました。次回作業は本物の水路整備を山形原圃にて行なう予定です。

環境 環教部会では、2005年4月25日の部会でかつて多摩キャンバスで行っていた養飼育の復活を決めました。部会が実行はプロジェクトチーム「多摩キャンバス復活させ隊」を組織し、キャノンバス内全域に呼びかけ学生、教職員、委託業者さんなどの輪広い協力を得るものになりました。初代隊長は同部会EMAS委員の岡崎雅史経済学部教授にお願いしました。

多摩キャンバスは1984年4月に開校。開校前の谷戸には崖が自然していましたが、開校と共に時に消滅。そこで1986年、当時の担当理事や施設担当者が崖の再生に取り組みました。八王子市内の道警専門校の指導を得て、4号調整池を整備して入口水路や施設整理等を設置。ようやく1990年6月、計470メートルのゲンジボウが活躍しました。その後も造園部門は順調に進みました。ここ数年は組織変更、人材调动等で現地の管理は放棄されましたが、ではなく、ボランティア方式。この活動を通じて、参加、不参加問わずキャンバスに関わる全ての人へ環境問題を考える場づくりを意図しています。

5月12日に「多摩キャンバスを復活させ隊の発足について(お知らせ)」を飛沫丸示板に貼り出し、5月18日に初の隊員会議にはA八出席し、岡部隊長が「楽しみながら新境にやりました」と挨拶され、第1段階は水路整備、第2段階はカワナを放流と育成、第3段階は幼虫の放流と育成、第4段階は幼虫解化・の作業取扱いを説明されました。5月23日、現地相談、水路周辺が背丈以上の雑草、水に覆われ、延べ約70メートルの水路を除去了すればまだ可能だと判断しました。いよいよ6月1日は本格的な作業に着手し、岡部隊長以下、スクアグ、手錠、カマを手に教員1、学生22人(女性が3人)が参加した。水路はまだ全通し、透明な流れが復活しました。この機会は新井新町立川支局が取扱され、翌日の多摩版に記事が掲載されました。夏場は蛇、ハサウエーが大量に生息しているのを確認しました。5月25日の第2回隊員会議では整備作業を終了し、水流確保と浄化を最優先とする方針を立てました。6月4日、放流中だった揚水ポンプが施設部の手配により修理完了。いよいよ6月6日は本格的な作業に着手し、岡部隊長以下、スクアグ、手錠、カマを手に教員1、学生22人(女性が3人)が参加した。水路はまだ全通し、透明な流れが復活しました。この機会は新井新町立川支局が取扱られ、翌日の多摩版に記事が掲載されました。10月13日、作業を再開、水路清掃を行いました。この間、岡部隊長以下約100人ほどのボランティアが泥棒石の撤去をして、数十四の魚が放流されました。現在、前の幼虫の糞となるカワナが放流を待っています。地元町会有志による川水辺のガワナの活性化をお願いしていますが、入手困難なのです。第2段階にすすむべく、地元からの吉報を得ています。なお、活動にあたっては相原大戸町会、町田市立大戸小学校、創価大学、町田市人地青少年センターのみなさん、作業にあたっては(株)エイチ・エーに協力をいただいています。

千代田区における企業の環境教育支援活動に関する調査研究報告 ～学校と地域社会が連携し協働して環境教育をすすめるために～

法政大学地政研究センター・リサーチアソシエイト
法政大学大学院政策科学研究科修士
山田 元紀

近年、環境教育への企業の参画が企業のCSR活動の一環として注目を集めています。そこに、企業の社会的貢献活動が学校での環境教育の活性に結びつく、という二つの面をみることができます。

地域研究センターは、環境教育への企業の参画について、「千代田区内立地企業と区立小学校の連携を行なうに、平成16年と17年に実施調査研究を行ないました。

はじめに

昨今、環境教育が世界的に注目されています。例えば、平成17年は、「国連持続可能な開発のための教育の10年」の最初の年に当たり、わが国では環境省が平成16年に、「環境の保全の意欲の喚起および環境教育の推進に関する法律」を制定し、家庭、学校から広がる環境の国づくりをめざしています。こうした環境教育への期待は、多様な環境問題解決には環境教育の充実が欠かせないと認識されるようになりましたからですが、環境教育はその問題の性質から最新の知識や情報、専門性などの点で学校の先生たただけでは難しいといった指摘もあります。そのためには、国や自治体、企業、大学あるいはNPO・NGOなどの民間団体や地域住民も含めた多くの関係者の連携と協働が望ましいとされています。

すでにいくつかの地域社会では創意工夫された環境教育が実施されていますが、それらは教育一筋の一的なものではなく、個性的で豊かな内容のものであり、それに關注する研究も一部の研究者によって積極的に進められています。地域研究センターは、特に企業が参画する環境教育に着目して、企業と学校との連携を協働して行なうためにこのような関係を作り上げる必要があるのか、そのための条件はなにか、などを調べてきました。

2 千代田区の環境教育の実態

千代田区は、平成15年度にISO14001の認証を取得し、翌年に区内幼稚小中学校全部で認証並大をひい、学校でのISO運営の重要な課題を環境教育と位置づけています。

一方、千代田区の人口は常に85万人（内、区内の

学校に通学する学生数は10万人である）を超えますが、夜間人口は4万人と極めて特異な地域であります。また、区内には36,000の事業所が存在し、その内の約300社は上場企業の本社で、ISO認証取得事業所も175ヶ所を超えています。このように、千代田区の環境教育重視のあり方と環境に配慮した経営を目指している優れた企業が多く存在しているという二つの点に着目して、「企業・学校が連携して行なう環境教育」の可能性を二年間にわたって調査研究を行なってきたのです。

平成16年度は、千代田区に本社を置く上場企業が「良き企業市民」としてどのような社会的貢献を行っているのかを上場企業296社にアンケートヒアリング調査を実施しました。また、環境報告書などから企業の社会貢献の全体像を把握し、千代田区への社会貢献活動の実態調査を行いました。その結果、6社が環境教育を通して地域支援活動の意図があることが分かり、平成17年度の調査は、千代田区内立地企業が学校の環境教育支援を行なうことの可能性と、それを実現するための諸条件について調査研究を行なってきました。

3 企業はいかに活動するか教育局

環境教育への協力を申し出ている企業に対しては、企業のもつ環境教育についての資源や資質とその意向の確認についてヒアリングを行い、千代田区の8ヵ所の区立小学校のクラス担任の先生たち全員（96名）へのアンケート調査と環境教育責任者全員へのヒアリングを、平成17年7月から8月にかけて実施しました。

アンケート調査及びヒアリングの内容は、①環境教育の実施、②企業との連携による環境教育を効果的に実施する環境教育支援の実績、③企業の環境教育支援について、④企業との連携による環境教育を効果的に行なうための条件など、です。また、これと平行して、わが国の各地で行われている同様の事例を調べ、その中から優れたものを数例選び詳しく調査し、あわせて先行研究についても本調査研究に資するものとして調査研究を行いました。

クラス担任に対して行ったアンケート調査から、半数以上